

第十話 性の解放のもたらすもの

みちのくの夏もどうやら終わりを告げ、一足一足近づいて来る秋の気配を感じるころになりました。ラジオをお聞きの皆様も、夏中のいろいろなプランを終え、今は改まった気持ちで毎日のお仕事にお励みのことと思います。今は少し肥り過ぎて暑さざらいの私ですが、それでも夏が巡り来る度毎に、若き日のわが家の夏の楽しい思い出が次から次へと浮かび出て、よい思い出を持ったこの身のしあわせがしみじみと感謝されるのです。

けれども、このごろの若い人たちは……となにも年寄りらしく愚痴るわけではありませんが、このごろの若い人たち、もちろん、若い人たちと言ってもその中のごくわずかな特殊な人たちがいますが、夏が来る度毎に、その一部の若い人たちの無軌道振りが、社会面をにぎわすのが戦後の通例になったようです。嘆かわしいことだ……などと私は道学者振りはいたしません。むしろ、そういう人たちの、何か考えの足りなさ……それも若い人たちの責任というより、しっかりと自分たちの心を引きつけ、強力に導いてくれるものがないばかりに、何をどうすればよい

のかわからなくなって、正しい軌道をはずれて行く、その青年たちの姿に……そうです、しかも、彼らが真剣であればあるだけ、私は、そういう若い人たちの無思慮な姿に、何かおとなである私自身が鞭打たれてでもいるような責任を感じるのです。

何でしたか、最近の週刊雑誌にも「驚くべき十代の桃色遊戯」と題してリポート記事が出ていましたが、私はそれを読んで、その主人公の少年たちではなく、全く別なものに、憤りを感じました。

戦後、忠君愛国の思想のよりどころを失った日本国民の前に、高々と、新しい道徳として、性の解放を叫んだのはいったい、だれでありましたか？ 一部の愚かな文芸家や、それに追従する評論家たち、それがジャーナリズムの背景に支えられて「今まで不当に抑圧された性は、今や解放された」と叫んだのを日本国民はよもや忘れはしないでしょう。そして、米軍の監督のもとに、すべての検閲は廃止され、みだらな裸体雑誌や煽情的な映画などが市場にはらんし始めました。それが新しい道徳というものならば、少年少女の桃色遊戯こそは、新しい道徳の黎明を告げる希望の鐘の響きにはかならないはず、だれがそれを無軌道呼ばわりできるのでしょうか？

学生輔導係に注意された少年たちが「僕たちは好きな者と、勝手に好きなことをやっているのだ。おとながやっているのに、なぜ僕たちだけが悪いのか？」と逆襲してくるというのも、実

は、もったもなことはないでしょうか？ 会社の重役になって金のできたので、本妻のほかに二号や三号のお妾（めかけ）を持っている人、あるいは少しでもお金ができると酒屋に入り浸って妻や子供の世話さえろくにできないような人たちが、自分の子供の前に手をついて

「おれはだめな人間なんだ。だが、せめてお前たちだけはおれのまねをせず、女狂いやアル中にならないでりっぱな人間になっておくれ。」

と、頭を下げ涙を流して告白するなら、話はわかります。が、そういう人たちが、このごろの若い者たちの無軌道振りにはあきれかえるなどとは言えた義理ではないはず。若い人たちのそんな行為が無軌道なら、もう充分に分別のあるはずのおとなたち自身の行為の方が、もっとも

っと無軌道だと言わねばなりません。

どうも、これは少し言葉が過ぎたかもしれません。許してください。私は何も他人の行為を非難したり、罵倒したりするつもりではありませんでした。ただ、今日の日本に、何かが見失われている……それが見失われたばかりにいたい、何が人間を幸福にするものかわからなくなつて、国民みんなが暗中模索（あんちゅうもさく）しているのではないかということを、皆様と一緒に考えてみたかったのでした。

仏教では、色即ち是れ空なるものと申しまして、人間の持っているもろもろの欲望というものを、

を、ただ、人間の迷いに過ぎぬと見ました。色は匂（にお）えど、散りぬるを……すべては無情（むじやう）の風の中にあきらめ去ろうとしました。もちろんこれは、深い東洋的な無の哲学の中に、深められ、浄められたりっぱな思想でありましたが、近代の強い人間性の自覚の前には、あまりにも消極的なものとして影を薄めて行ったようです。あるがままの人間性、そこには、否定したくともできない数々の欲望が……中でも食欲と性欲という二つのものが、歴然とおのが存在を主張しています。すべての人間に共通した欲望というものがあつたという事実、それが大自然の摂理によって与えられたものであるという事を意味しますので、これらの欲望は必要なもの、有意義なものであるはず。私はこれらの欲望が正しいものだと思いますし、人間はだれでも、その欲望を満足させる権利を持っていると信じています。けれどもあるものが正しいということは、それが正しく、その意義と目的に従って用いられるときに言えるのです。たとえば、お父さんが子供に野球のバットを買ってやったとしましょう。それはりっぱな運動用具で、それを所有することは少しも悪いことはありませんが、それは野球の時に、それでボールを打つために用いねばなりません。もしも、子供が、そのバットを悪用して、友だちをなぐる道具として用いるなら、お父さんは子供にバットを買ってやったことを後悔するでしょう。

欲望というもの、それを、その意義と目的に従って正しく用いるときにのみ、それがりっ

ばな、むしろ、神聖なものとなるのです。今、食欲と性欲とを例にとってみるなら、食欲は私たちの生命保存の義務を、性欲は人類保存の義務を、人間がただこれを義務としてのみうるさく感じないで、むしろ喜々として進んで果たすようにと、大自然の不思議な摂理の中に織り込まれた手段であるとは、だれも疑う人はないでしょう。動物はお腹がいっぱいになったら、もう食物に口を出そうとはしませんし、交尾期が過ぎたなら、メスの動物が近づいても振り向きもいたしません。本能が、その欲望の使い道を巧みに導いているからです。ただ人間だけは、それを、ただの本能としてだけではなく、更に精神的なものにまで高めることを知り、遠来の客と共に一献傾けることの中に深い友情のつながりを見出し、性の行為を男女の愛情の表現として用いることを覚えました。それはそれで正しいことなのですが、だからと言って、この二つの欲望の本来の目的、すなわち、生命保存の義務と、人類保存の義務を果たすための推進力としての目的と意義とを見失ってはいけないのです。ですから第一義的ともいえるべきその義務を真向から拒んで、ただ、他の目的のためにのみ、この欲望の快楽を食うことは、自然の道にはずれた行ないになるとはきわめて当然な結論でありましょう。

けれども、元来、食欲や性欲は非常に強烈な本能なので、ともすると、ただ、その快感と享樂とにのみ走りやすいので、本来の正しい意義に沿い、正しい目的に従うと同時に、更にそれに精

神的な要素をも加えて、それを人間らしい誇りをもって聖く用いて行くためには強力な理性のわくが必要となるのです。そこにこそ、理性的動物と呼ばれる人間の値打ちがあるのでしょう。

戦後、盛んに唱えられた「性の解放」とはいったいどういうことでしょうか？ 私たちはサーカスに行つて猛獣使いがライオンや豹などの猛獣を巧みに扱うのを、ただ、感心して眺めていることができます。なぜなら、がんばりょうな鉄の檻がめぐらしてあるからです。けれど、もしあの鉄の檻の一角がくずれたとしたらどうでしょう。悍猛な動物がその野性に返り、猛然と唸り声をあげて観客に躍りかかり、楽しかるべきサーカスは目もあてられぬ阿鼻叫喚の巷と化してしまう。人間の持つ動物としての本能もそうなのです。もしこの人間の世界から「理性」という鉄柵が取り払われるなら……ああ思っただけでもゾッとします。が、青少年の性的犯罪から、酒ゆえの家庭悲劇の数々、果ては新聞紙上をにぎわす痴情の果ての刃傷沙汰など、現代の世相は、まさに檻を破って飛び出した猛獣のかもしれないです。阿鼻叫喚の世界を彷彿とさせるものがあると、皆様はお気づきにはなりませんか？

人間の動物性が理性の鉄柵をうち破るとき人間は、最早欲望の主人ではなくて、欲望のどれいとなるのです。私は、たまに、遠来の客を迎えて美酒を汲みかわすあの喜びを知っています。けれども、もし、私が、もうやめなければいけない、もうこれ以上はいけないのだと、自分自身に

山のこちら側は隅もなく探して見た。しかし富も名声も快楽も、私の生命を満たしてはくれなかった。だが山の向こう側、まだ行ったことのない未知の世界にこそしあわせがあると人々は言っていた。そこで、私は友だちと連れ立って山を越えてはみたものの、山のかなたも山のこちらも何の変わりもなかったのだ。私の求めているもの、私をほんとうに満ち足りたものにしてくれるしあわせが、ほんとうにどこにあるのだろうか？ と詩人は悲しく自分に問うのです。

富も、名声も、快楽も、あってよいもの、しかし、それは私たちの生命の目的ではないとすれば、しあわせは、どこにあるのでしょうか？

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。

では皆様、また来週のこの時間まで。

さようなら。

言い聞かせながら、なお、それでも、どうしても、盃を口から離せないとなると、もう、これは喜びではありません。私は酒のどれいとなるのです。

これ以上深まっていけない。自分の夫、あるいは妻となる相手ではないと知りながら、激しい肉欲の渇きに、ついによりめいて、越えてならぬ堰を越えたとき、その瞬間に、清らかな愛情は消え去ります。お互いに寄せあったほのかな尊敬と愛情とは、ただれた肉欲とお互いの憎しみに席を譲るでしょう。一度、不倫な愛欲におぼれたなら、どうして次の欲望を制御できましょう。こうしてひとりの異性から他の異性へと、愛欲の満足を求めて転々と渡り歩く、愚かないのちの営みからは、身も心も疲れ、汚れ、ただれ果てたみじめな思い以外に何が生まれて来るでしょうか？

山の彼方の空遠く、幸住むと人の言う。

我、友どちとめ行きて、涙さしぐみ帰り来ぬ。

山の彼方になお遠く、幸住むと人の言う。

と、英国の詩人カール・ブッセは悲しく歌いました。